

Sanshirō Chapter 7 (Natsume Sōseki)

裏から回ってばあさんに聞くと、ばあさんが小さな声で、与次郎さんはきのうからお帰りな
さらないと。三四郎は勝手口に立って考えた。ばあさんは気をきかして、まあおはいりな
さい。先生は書斎においでですからと言いながら、手を休めずに、膳碗を洗っている。今
晩食がすんだばかりのところらしい。

三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝いに書斎の入口まで来た。戸があいている。中から
「おい」と人を呼ぶ声がある。三四郎は敷居のうちへはいった。先生は机に向かっている。
机の上には何があるかわからない。高い背が研究を隠している。三四郎は入口に近くすわっ
て、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。先生は顔をうしろへねじ向けた。髭の影が不明瞭にも
じゃもじゃしている。写真版で見ただれかの肖像に似ている。

「やあ、与次郎かと思ったら、君ですか、失敬した」と言って、席を立った。机の上には筆
と紙がある。先生は何か書いていた。与次郎の話に、うちの先生は時々何か書いている。し
かし何を書いているんだか、ほかの者が読んでもちっともわからない。生きているうちに、
大著述にでもまとめられれば結構だが、あれで死んでしまっちゃあ、反古がたまるばかり
だ。じつにつまらない。と嘆息していたことがある。三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次
郎の話を思い出した。

「おじゃまなら帰ります。べつだんの用事でもありません」

「いや、帰ってもらうほどじゃまでもありません。こっちの用事もべつだんのことでもないん
だから。そう急に片づけるたちのものをやっていたんじゃない」

三四郎はちょっと挨拶ができなかった。しかし腹のうちでは、この人のような気分になれた
ら、勉強も楽にできてよかろうと思った。しばらくしてから、こう言った。

「じつは佐々木君のところへ来たんですが、いなかったものですから……」

「ああ。与次郎はなんでもゆうべから帰らないようだ。時々漂泊して困る」

「何か急に用事でもできたんですか」

「用事はけっしてできる男^{おとこ}じゃない。ただ用事をこしらえる男でね。ああいうばかは少ない^{すく}」

三四郎はしかたがないから、

「なかなか気^{きらく}楽ですな」と言った。

「気^{きらく}楽ならいいけれども。与^{よじろう}次郎のは気^き楽なのじゃない。気^きが移^{うつ}るので——たとえば田^たの中^{なか}を流^{なが}れている小^{おがわ}川^{かわ}のようなものと思^{おも}っていれば間^ま違^{まちが}いはない。浅^{あさ}くて狭^{せま}い。しかし水^{みず}だけはしじゅう変^{かわ}っている。だから、する事^{こと}が、ちっとも締^しまりがない。縁^{えん}日^{にち}へひやかしになど行^いくと、急^{きゅう}に思^{おも}い出^だしたように、先^{せん}生^{せい}松^{まつ}を一^{ひと}鉢^{はち}お買^かいなさいなんて妙^{みょう}なことを言^いう。そうして買^かうともなんとも言^いわないうちに値^ね切^ぎって買^かってしま^まう。その代^{かわ}り縁^{えん}日^{にち}ものを買^かうことなんぞはじょうずでね。あいつに買^かわせるとたいへん安^{やす}く買^かえる。そうかと思^{おも}うと、夏^{なつ}になつてみんなが家^{うち}を留^{るす}守^しにするときなんか、松^{まつ}を座^ざ敷^{しき}へ入^いれたま^まま雨^{あま}戸^どをたてて錠^{じょう}をおろしてしま^まう。帰^{かえ}ってみると、松^{まつ}が温^{うん}気^きでむれてま^ま赤^かになつている。万^{ばん}事^じそういうふうでま^まこと^{こと}に困^{こま}る」

実^{じつ}をいうと三^{さん}四^し郎^{ろう}はこのあ^いだ与^よ次^じ郎^{ろう}に二^に十^{じゅう}円^{えん}貸^かした。二^に週^{しゅう}間^{かん}後^ごには文^{ぶん}芸^{げい}時^じ評^{ひょう}社^{しゃ}から原^{げん}稿^{こう}料^{りょう}が取^とれるはずだから、それま^まで立^た替^かえてくれろと言^いう。事^じ理^りを聞^きいてみると、気^きの毒^{どく}であつたから、国^{くに}から送^{おく}つてきたばかりの為^{かわ}替^せを五^ご円^{えん}引^ひいて、余^{あま}りはことごとく貸^かしてしまつた。ま^まだ返^{かえ}す期^き限^{げん}ではないが、広^{ひろ}田^たの言^い話を聞^きいてみると少^{しょう}々^{しょう}心^{しん}配^{ぱい}になる。しかし先^{せん}生^{せい}にそ^そんな事^じは打^うち明^あけられ^{られ}ないから、反^{はん}対^{たい}に、

「でも佐^さ々^さ木^き君^{くん}は、大^{おお}いに先^{けん}生^{せい}に敬^{けい}服^{ふく}して、陰^{かげ}では先^{せん}生^{せい}のためにな^なかなか尽^{じん}力^{りょく}して^{して}います」と言^いうと、先^{せん}生^{せい}はま^まじめにな^なつて、

「どんな尽^{じん}力^{りょく}を^をして^{して}いる^るんですか」と聞^ききだした。ところ^{ところ}が「偉^い大^{だい}なる暗^{くら}闇^{やみ}」そ^その他^たすべ^べて^て広^{ひろ}田^た先^{せん}生^{せい}に關^{かん}する与^よ次^じ郎^{ろう}の所^{しよ}為^ゐは、先^{せん}生^{せい}に話^わしてはな^なら^らない^いと、当^{とう}人^{にん}から封^{ふう}じ^じら^られて^ている。や^やり^りか^かけ^けた^た途^と中^{ちゆう}でそ^そんな事^じが知^しれると先^{せん}生^{せい}にし^しか^から^られる^るに^にき^きま^まつ^つて^てる^るから^ら黙^{だま}つ^つて^てい^いる^るべ^べき^きだ^だと^とい^いう。話^わして^{して}い^いい^い時^{とき}にはお^おれ^れが^が話^わす^すと明^{めい}言^{げん}して^{して}い^いる^るんだ^だから^らし^しか^かた^たが^がな^ない。三^{さん}四^し郎^{ろう}は話^わを^をそ^そら^らして^{して}しま^まつた。

さんしろう ひろた うち く 三四郎が広田の家へ来るにはいろいろな意味がある。一つは、この人の生活その他が普通のものかわと変かわっている。ことに自分の性情じぶん せいじょうとはまったく容れないようなところがある。そこで三四郎はどうしたらあなるだろうという好奇心こうきしんから参考さんこうのため研究けんきゅうに来る。次にこの人の前まえに出るとのん気になる。世の中の競争きょうそうがあまり苦にならない。野々宮さんも広田先生と同じく世外の趣せがい おもむきはあるが、世外の功名心こうみょうしんのために、流俗りゅうぞくの嗜欲しよくを遠ざけているかのように思われる。だから野々宮さんを相手に二人ふたりで話していると、自分もはやく一人前の仕事しごとをして、学海がっかいに貢献こうけんしなくては済まないような気が起こる。いらついてたまらない。そこへゆくと広田先生は太平たいへいである。先生は高等学校でただ語学ごがくを教えるだけで、ほかになんの芸げいもない——しつれいといつては失礼だが、ほかになんらの研究おおやけも公こうけにしない。しかも泰然たいぜんと取り澄ましすている。そこに、こののん気の源みなもとは伏在ふくざいしているのだろうと思う。三四郎は近ごろ女ちかにとらわれた。恋人こいびとにとらわれたのなら、かえっておもしろいが、ほれられているんだか、ばかにされているんだか、こわがっていいんだか、さげすんでいいんだか、よすべきだか、続けつづべきだかわけのわからないとらわれ方かたである。三四郎はいまときましくなった。そういう時は広田さんにかぎる。三十分ほど先生と相対そうたいしていると心持こころもちが悠揚ゆうようになる。女の一人ひとりや二人ふたりどうなってもかまわないと思う。実をいうと、三四郎が今夜出かけてきたのは七分方この意味である。

ほうもんり ゆ だいさん 訪問理由の第三はだ**いぶ**矛盾むじゆんしている。自分じぶんは美禰子みねこに苦くるんでいる。美禰子のそばに野々宮さんを置くと**な**お苦しんでくる。その野々宮さんにもっとも近いものはこの先生である。だから先生の所ところへ来ると、野々宮さんと美禰子との関係かんけいがおのずから明瞭めいりょうになってくるだろうと思う。これが明瞭になりさえすれば、自分の態度たいども判然はんぜんきめることができる。そのくせ二人ふたりの事ことをいまだかつて先生に聞いたことがない。今夜は一つ聞いてみようかしらと、こころ うご心を動かした。

「野々宮さんは下宿げしゆくなすったそうですね」

「ええ、下宿したそうです」

「家うちをもった者ものが、また下宿ふべんをしたら不便ふべんだろうと思いますが、野々宮さんはよく……」

「ええ、そんな事には**い**つこう無頓着むとんじゃくなほうでね。あの服装ふくそうを見てもわかる。家庭的かていてきな人ひとじゃない。その代り学問がくもんにかけると非常ひじょうに神経質しんけいしつだ」

「当分ああやっておいでのつもりなんですか」

「わからない。また突然家を持つかもしれない」

「奥さんでもお貰いになるお考えはないんでしょうか」

「あるかもしれない。いいのを周旋してやりたまえ」

三四郎は苦笑いをして、よけいな事を言ったと思った。すると広田さんが、

「君はどうです」と聞いた。

「私は……」

「まだ早いですね。今から細君を持ちたいへんだ」

「国の者は勧めますが」

「国のだれが」

「母です」

「おっかさんのいうとおりに持つ気になりますか」

「なかなかありません」

広田さんは髭の下から歯を出して笑った。わりあい綺麗な歯を持っている。三四郎はその時急になつかしい心持ちがした。けれどもそのなつかしさは美禰子を離れている。野々宮を離れている。三四郎の眼前の利害には超絶したなつかしさであった。三四郎はこれで、野々宮などの事を聞くのが恥ずかしい気がして、質問をやめてしまった。すると広田先生がまた話した。――

「おっかさんのいうことはなるべく聞いてあげるがよい。近ごろの青年は我々時代の青年と違って自我の意識が強すぎていけない。我々の書生をしているころには、する事なす事一として他を離れたことはなかった。すべてが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他

ほんい ひとくち きょういく う ぎぜんか
本位であった。それを一口にいうと教育を受けるものがことごとく偽善家であった。その
ぎぜん へんか は とお けっか ぜんぜんじこ しそうこうい うえ
偽善が社会の変化で、とうとう張り通せなくなった結果、漸々自己本位を思想行為の上に
ゆにゆう こんど がいしき ひじょう はってん むかし
輸入すると、今度は我意識が非常に発展しすぎてしまった。昔の偽善家に対して、今は
るあくか じょうたい きみ ことば
露悪家ばかりの状態にある。——君、露悪家という言葉聞いたことがありますか」

「いいえ」

「今ぼくが即席につく 君もその露悪家の一人——だかどうだか、まあたぶんそう
だろう。与次郎のごときにいたるとその最たるものだ。あの君の知ってる里見という女があ
るでしょう。あれも一種の露悪家で、それから野々宮の妹ね、あれはまた、あれなりに露悪
家だから面白い。昔は殿様と親父だけが露悪家ですんでいたが、今日では各自同等の権利で
露悪家になりたがる。もっとも悪い事でもなんでもない。臭いものの蓋をとれば肥桶で、
みごと けいしき ろあく し き
見事な形式をはぐとたいていは露悪になるのは知れ切っている。形式だけ見事だつて面倒なば
かりだから、みんな節約して木地だけで用を足している。はなはだ痛快である。天醜爛漫
としていて。ところがこの爛漫が度を越すと、露悪家同志がお互いに不便を感じてくる。その
不便がだんだん高じて極端に達した時利他主義がまた復活する。それがまた形式に流れて
ふはい り こしゅぎ きさん さいげん
腐敗するとまた利己主義に帰参する。つまり際限はない。我々はそういうふうにして暮らして
ゆくものと思えばさしつかえない。そうしてゆくうちに進歩する。英国を見たまえ。この両
しゅぎ へいこう うご
主義が昔からうまく平衡がとれている。だから動かない。だから進歩しない。イブセンも出な
ければニイチェも出ない。気の毒なものだ。自分だけは得意のようだが、はたから見れば堅く
なつて、せきか
化石しかかっている。……」

さんしろう ないしんかんしん はなし ま ふと
三四郎は内心感心したようなものの、話がそれとんだところへ曲がって、曲がりなりに太
くなつてゆくので、少し驚いていた。すると広田さんもようやく気がついた。

「いったい何を話していたのかな」

「結婚の事です」

「結婚？」

「ええ、私が母の言うことを聞いて……」

「うん、そうそう。なるべくおっかさんの言うことを聞かなければいけない」と言ってにこにこしている。まるで子供^{こども}に対する^{たい}ようである。三四郎はべつに腹^{はら}も立た^たなかつた。

「我々^{われわれ}が露悪家^{ろあくか}なのは、いいですが、先生時代^{せんせいじだい}の人が偽善家^{ぎぜんか}なのは、どういう意味^{いみ}ですか」

「君^{きみ}、人から親切^{しんせつ}にされて愉快^{ゆかい}ですか」

「ええ、まあ愉快です」

「きっと？ ぼくはそうでない、たいへん親切^{ふゆかい}にされて不愉快^{ふゆかい}な事がある」

「どんな場合^{ばあい}ですか」

「形式^{けいしき}だけは親切^{しんせつ}にかなっている。しかし親切^{しんせつ}自身^{じしん}が目的^{もくてき}でない場合」

「そんな場合があるでしょうか」

「君^{がんにつ}、元日^{げんじつ}におめでとうと言われて、じっさいおめでたい気^きがしますか」

「そりゃ……」

「しないでらう。それと同じく腹^{おな}をかかえて笑^{はら}うだの、ころげかえって笑^{わら}うだのというやつに、一人^{ひとり}だってじっさい笑^{やくめ}ってるやつはない。親切^{しんせつ}もそのとおり。お役目^{やくめ}に親切^{しんせつ}をしてくれるのがある。ぼくが学校^{がっこう}で教師^{きょうし}をしているようなものでね。実際^{じっさい}の目的^{もくてき}は衣食^{いしょく}にあるんだから、生徒^{せいと}から見^みたらさだめて不愉快^{ふゆかい}だらう。これに反^{はん}して与次郎^{よじろう}のごときは露悪党^{ろあくとう}の領^{りょう}袖^{しゅう}だけに、たびたびぼくに迷惑^{めいわく}をかけて、始末^{しまつ}におえぬいたずら者^{もの}だが、悪気^{にくげ}がない。可愛^{かわい}らしいところがある。ちょうどアメリカ人^{じん}の金銭^{きんせん}に対して露骨^{ろこつ}なのと一般^{いっぱん}だ。それ自身^{じしん}が目的^{もくてき}である。それ自身^{じしん}が目的^{もくてき}である行為^{こうい}ほど正直^{しょうじき}なものはなくって、正直^{しょうじき}ほど厭味^{いやみ}のないものはないんだから、万事^{ばんじ}正直^{しょうじき}に出^でられないような我々^{われわれ}時代の、こむずかしい教育^{きょういく}を受けたものはみんな気障^{きざ}だ」

ここまでの理屈^{りくつ}は三四郎^{さんしろう}にもわかっている。けれども三四郎^{さんしろう}にとって、目下^{もっかつうせつ}痛切^{もんだい}な問題は、だいたいわたっての理屈^{りくつ}ではない。実際^{じっさい}に交渉^{こうしょう}のある、ある格段^{かくだん}な相手^{あいて}が、正直^{しょうじき}か正直^{しょうじき}でないかを知^しりたいのである。三四郎^{さんしろう}は腹^{はら}の中^{なか}で美禰子^{みねこ}の自分^{じぶん}に対する素振^{たいそぶり}をもう一^{いっ}ぺん考^{かんが}え

てみた。ところが^{きぎ}気障か^{きぎ}気障でないかほとんど^{ほんだん}判断^{かんじゆせい}ができない。三四郎は自分の^{かんじゆせい}感受性が
^{ひといちばいにぶ}人一倍^{うたが}鈍い^{うたが}のではなからうかと^{うたが}疑^{うたが}いだした。

その時^{ときひろた}広田^{きゆう}さんは急^いにうんと^{なに}言^{おも}って、何^だか思^だい出^だしたようである。

「うん、まだある。この^{にじゆっせい}二十世紀^{みょう}になってから^{はや}妙^りなのが^り流行^{ないよう}る。利他^り本位^{こほんい}の内容^りを利己^り本位^りで^{くち}みたすという^{くち}むずかしい^{きみ}やり口^{ひと}なんだが、君^でそんな人^あに出^あ会^あったですか」

「どんなのです」

「ほかの^{ことば}言葉^{ぎぜん}でいうと、偽善^{おこな}を行^{ろあく}うに露悪^{ろあく}をもつてする。まだわからないだろうな。ちと
^{せつめい}説明^{かた}し方が^{わる}悪い^{むかし}ようだ。――昔^{むかし}の偽善家^{ぎぜんか}はね、なんでも人^{おも}によく思^{おも}われたいが^{さき}先に^た立つんで
^{はんたい}しょう。ところがその^{はんたい}反対^{かんしやく}で、人^{がい}の感^{がい}触^{がい}を害^{がい}するために、わざわざ^{よこ}偽善^みをやる。横^{よこ}から^み見て
^{たて}も縦^{たて}から見^{たて}ても、相手^{たて}には偽善^{たて}としか思^{たて}われな^{たて}いように^{たて}しむけて^{たて}ゆく。相手^{たて}はむろん^{たて}いやな
^{こころも}心^{こころも}持^{こころも}ちが^{こころも}する。そこで^{ほんにん}本人^{もくてき}の^{たつ}目的^{たつ}は^{たつ}達^{たつ}せられる。偽善^{せんぼう}を^{てきよう}偽善^{てきよう}その^{てきよう}まま^{てきよう}で先^{せんぼう}方^{てきよう}に^{てきよう}通^{せんぼう}用^{てきよう}させ^{せんぼう}よ
^{ろあくか}うとする^{とくしやく}正直^{ひょうめんじょう}な^{こういげんご}ところ^{ぜん}が^{ちが}露^{ぜん}悪^{ちが}家^{ちが}の^{ちが}特^{ちが}色^{ちが}で、^{ちが}しかも^{ちが}表^{ちが}面^{ちが}上^{ちが}の^{ちが}行^{ちが}為^{ちが}言^{ちが}語^{ちが}は^{ちが}あく^{ちが}ま^{ちが}でも^{ちが}善^{ちが}に^{ちが}違^{ちが}
^にい^にない^にから、――そら、二^に位^に一^に体^にと^にい^にう^によう^にな^にこ^にと^になる。この^{ほうほう}方法^{こうみょう}を^{もち}巧^{もち}妙^{もち}に^{もち}用^{もち}いる^{もち}者^{もち}が
^{きんらい}近^{きんらい}来^{きんらい}だ^{きんらい}い^{きんらい}ぶ^{きんらい}ふ^{きんらい}え^{きんらい}て^{きんらい}き^{きんらい}た^{きんらい}よ^{きんらい}う^{きんらい}だ。き^{しんけい}わ^{えいびん}め^{えいびん}て^{えいびん}神^{ぶんめいじんしゅ}経^{ぶんめいじんしゅ}の^{ぶんめいじんしゅ}鋭^{ぶんめいじんしゅ}敏^{ぶんめいじんしゅ}に^{ぶんめいじんしゅ}な^{ぶんめいじんしゅ}った^{ぶんめいじんしゅ}文^{ぶんめいじんしゅ}明^{ぶんめいじんしゅ}人^{ぶんめいじんしゅ}種^{ぶんめいじんしゅ}が、^{ぶんめいじんしゅ}も^{ぶんめいじんしゅ}つ^{ぶんめいじんしゅ}と^{ぶんめいじんしゅ}も^{ぶんめいじんしゅ}優^{ぶんめいじんしゅ}美^{ぶんめいじんしゅ}に^{ぶんめいじんしゅ}露^{ぶんめいじんしゅ}
^ち悪^ち家^ちに^ちな^ちら^ちう^ちと^ちす^ちると、^ちこれ^ちが^ちい^ちち^ちば^ちん^ちい^ちい^ち方法^ちに^ちなる。血^ちを^ち出^ちさ^ちな^ちけ^ちれ^ちば^ち人^ちが^ち殺^ちせ^ちない^ちとい^ち
^{やばん}う^{はなし}のは^{はなし}ず^{はなし}い^{はなし}ぶ^{はなし}ん^{はなし}野^{はなし}蛮^{はなし}な^{はなし}話^{はなし}だ^{はなし}か^{はなし}ら^{はなし}な^{はなし}君^{はなし}、だ^{はなし}ん^{はなし}だ^{はなし}ん^{はなし}流^{はなし}行^{はなし}ら^{はなし}な^{はなし}く^{はなし}な^{はなし}る」

^{ひろたせんせい}広田^{はな}先生^{かた}の話^{はな}し^{かた}方^{かた}は、^{あんないしや}ち^{こせんじょう}ょう^{せつめい}ど^{せつめい}案^{せつめい}内^{せつめい}者^{せつめい}が^{せつめい}古^{じっさい}戦^{とお}場^{とお}を^{とお}説^{とお}明^{とお}する^{とお}よ^{とお}う^{とお}な^{とお}も^{とお}の^{とお}で、^{とお}実^{とお}際^{とお}を^{とお}遠^{とお}く^{とお}か^{とお}ら^{とお}
^{ちい}なが^{ちい}め^{ちい}た^{ちい}地^{ちい}位^{ちい}に^{ちい}み^{ちい}ず^{ちい}か^{ちい}ら^{ちい}を^{ちい}置^{ちい}いて^{ちい}いる。それ^{ちい}が^{ちい}す^{ちい}こ^{ちい}ぶ^{ちい}る^{ちい}楽^{ちい}天^{ちい}の^{ちい}趣^{ちい}が^{ちい}あ^{ちい}る。あ^{ちい}た^{ちい}か^{ちい}も^{ちい}教^{ちい}場^{ちい}
^{こうぎ}で^{こうぎ}講^{こうぎ}義^{こうぎ}を^{こうぎ}聞^{こうぎ}くと^{こうぎ}一^{こうぎ}般^{こうぎ}の^{こうぎ}感^{こうぎ}を^{こうぎ}起^{こうぎ}こ^{こうぎ}さ^{こうぎ}せ^{こうぎ}る。し^{こうぎ}か^{こうぎ}し^{こうぎ}三^{こうぎ}四^{こうぎ}郎^{こうぎ}に^{こうぎ}は^{こうぎ}こ^{こうぎ}た^{こうぎ}え^{こうぎ}た。念^{こうぎ}頭^{こうぎ}に^{こうぎ}美^{こうぎ}禰^{こうぎ}子^{こうぎ}と^{こうぎ}い^{こうぎ}う^{こうぎ}女^{こうぎ}
^{りろん}が^{りろん}あ^{りろん}っ^{りろん}て、^{りろん}こ^{りろん}の^{りろん}理^{りろん}論^{りろん}を^{りろん}す^{りろん}ぐ^{りろん}適^{りろん}用^{りろん}で^{りろん}き^{りろん}る^{りろん}か^{りろん}ら^{りろん}で^{りろん}あ^{りろん}る。三^{りろん}四^{りろん}郎^{りろん}は^{りろん}頭^{りろん}の^{りろん}中^{りろん}に^{りろん}こ^{りろん}の^{りろん}標^{りろん}準^{りろん}を^{りろん}置^{りろん}いて、
^{はか}美^{はか}禰^{はか}子^{はか}の^{はか}す^{はか}べ^{はか}て^{はか}を^{はか}測^{はか}つ^{はか}て^{はか}み^{はか}た。し^{はか}か^{はか}し^{はか}測^{はか}り^{はか}切^{はか}れ^{はか}ない^{はか}と^{はか}こ^{はか}ろ^{はか}が^{はか}たい^{はか}へ^{はか}ん^{はか}あ^{はか}る。先^{はか}生^{はか}は^{はか}口^{はか}を^{はか}閉^{はか}じ^{はか}
^{れい}て、^{れい}例^{れい}の^{れい}ご^{れい}と^{れい}く^{れい}鼻^{れい}か^{れい}ら^{れい}哲^{れい}学^{れい}の^{れい}煙^{れい}を^{れい}吐^{れい}き^{れい}始^{れい}め^{れい}た。

と^{げんかん}こ^{あしおと}ろ^{あしおと}ろ^{あしおと}へ^{あしおと}玄^{あしおと}関^{あしおと}に^{あしおと}足^{あしおと}音^{あしおと}が^{あしおと}し^{あしおと}た。案^{あしおと}内^{あしおと}も^{あしおと}乞^{あしおと}わ^{あしおと}ず^{あしおと}に^{あしおと}廊^{あしおと}下^{あしおと}伝^{あしおと}い^{あしおと}には^{あしおと}い^{あしおと}っ^{あしおと}て^{あしおと}来^{あしおと}る。た^{あしおと}ち^{あしおと}ま^{あしおと}ち^{あしおと}与^{あしおと}次^{あしおと}郎^{あしおと}が
^{しょさい}書^{しょさい}斎^{しょさい}の^{しょさい}入^{しょさい}口^{しょさい}に^{しょさい}す^{しょさい}わ^{しょさい}つ^{しょさい}て、

「原口さんがおいでになりました」と言う。ただ今帰りましたという挨拶を省いている。わざと省いたのかもしれない。三四郎にはぞんざいな目礼をしたばかりですぐに出ていった。

与次郎と敷居ぎわですれ違って、原口さんがはいつて来た。原口さんはフランス式の髭をはやし、頭を五分刈にした、脂肪の多い男である。野々宮さんより年が二つ三つ上に見える。広田先生よりずっときれいな和服を着ている。

「やあ、しばらく。今まで佐々木が家へ来ていてね。いっしょに飯を食ったり何かして——それから、とうとう引っ張り出されて……」とだいぶ楽天的な口調である。そばにいるとしぜん陽気になるような声を出す。三四郎は原口という名前を聞いた時から、おおかたあの画工だろうと思っていた。それにしても与次郎は交際家だ。たいていな先輩とはみんな知合いになっているからえらいと感心して堅くなった。三四郎は年長者の前へ出ると堅くなる。九州流の教育を受けた結果だと自分では解釈している。

やがて主人が原口に紹介してくれる。三四郎は丁寧に頭を下げた。向こうは軽く会釈した。三四郎はそれから黙って二人の談話を承っていた。

原口さんはまず用談から片づけると言いつて、近いうちに会をするから出てくれと頼んでいゝ。会員と名のつくほどのりっぱなものはこしらえないつもりだが、通知を出すものは、文学者とか芸術家とか、大学の教授とか、わずかな人数にかぎっておくからさしつかえはない。しかもたいてい知合いのあいだから、形式はまったく不必要である。目的はただおぜい寄つて晩餐を食う。それから文芸上有益な談話を交換する。そんなものである。

ひろたせんせい「出よう」と言つた。用事はそれで済んでしまつた。用事はそれで済んでしまつたが、それから後の原口さんと広田先生の会話がすこぶるおもしろかつた。

広田先生が「君近ごろ何をしているかね」と原口さんに聞くと、原口さんがこんな事を言う。

「やっぱり一中節を稽古している。もう五つほど上げた。花紅葉吉原八景だの、小稲半兵衛唐崎心中だのってなかなかおもしろいがあるよ。君も少しやってみないか。もっともありや、あまり大きな声を出しちやいけないんだつてね。本来が四畳半の座敷にかぎつた

ものだそうだ。ところがぼくがこのとおりの大きな声だろう。それにふしまわ節回しがあれでなかなかこ込み入っているんで、どうしてもうまくいかん。こんだひと一つやるから聞いてくれたまえ」

ひろたせんせい わら
広田先生は笑っていた。すると原口はらぐちさんはつづ続きをこういうふうのに述べた。

「それでもぼくはまだいいんだが、さとみきょうすけ里見恭助ときたら、まるでかたな形無しだからね。どういふものかしらん。いもうと妹はあんなにきょう器用なのに。このあいだはとうとうこうさん降参して、もううた歌はやめる、その代り何かかわ楽器をな習おうと言いだしたところが、ば馬鹿か囃子やしをおお習いなさらないかとすす勧めた者があってね。大笑いさ」

「そりやほんとう本当かい」

「本当とも。げん現に里見がぼくに、きみ君がやるならやってもいいと言ったくらいなもの。あれで馬鹿やとお囃子には八はや通りかた囃し方があるんだそうだ」

「君、やっちゃどうだ。あれならふつう普通の人間にんげんにでもできそうだ」

「いや馬鹿囃子はいやだ。それよりかつづみ鼓うが打ってみたくってね。なぜだか鼓おとの音きを聞いていると、まったくにじゅっせき二十世紀きの気がしなくなるからいい。どうして今いまの世よにああ間まが抜けていられるだろうとおも思うと、それだけでたいへんなくすり薬になる。いくらぼくがのん気きでも、鼓の音のよえうな絵はとともかけないから」

「かこうともしないんじゃないか」

「かけないんだもの。今のとうきょう東京ゆうようにいる者に悠揚ゆうような絵ができるものか。もつとも絵にもかぎるまいけれども。——絵といえ、このあいだだいがく大学のうんどうかい運動会いへ行ののみやって、里見と野々宮ののみやさんの妹いもうとのカリカチュアールをかいてやろうと思おもったら、とうとう逃にげられてしまった。こんだひと一つ本ほん当とうの肖像画しょうぞうがをかいて展てんらんかい覧会だにでも出でそうかと思おもって」

「だれの」

「里見さとみの妹いもうとの。どうも普通ふつうの日本にほんの女おんなの顔かおは歌曆式うたまるしきや何かなにばかりで、西洋せいようの画布キャンパスにはうわるつりが悪わるくっていけないが、あの女おんなや野々宮ののみやさんりようほうはいい。両方りようほうともに絵えになる。あの女おんなが

うちわ こだち あか ほう む ライフサイズ うつ
団扇をかざして、木立をうしろに、明るい方を向いているところを等身に写してみようかしらおもと思っている。西洋の扇おうぎは厭味いやみでいけないが、日本の団扇は新あたしくっておもしろいだろう。とにかくはやくしないとだめだ。いまに嫁よめにでもいかれようものなら、そうこっちの自由じゆにいかなくなるかもしれないから」

さんしろう ただい きょうみ はらぐち はなし き みねこ
三四郎は多大な興味をもって原口の話はなしを聞いていた。ことに美禰子みねこが団扇をかざしている
こうず ひじょう かんどう あた ふしぎ いんえん ふたり あいだ さんざい
構図は非常な感動を三四郎に与えた。不思議の因縁が二人の間に存在しているのではない
かと思うほどであった。するとひろた先生が、「そんな図ずはそうおもしろいこともないじゃないか」と無遠慮な事を言いだした。

「でも当人の希望とうじん きぼうなんだもの。団扇をかざしているところは、どうでしょうと言うから、すこぶる妙みょうでしょうと言って承知しょうちしたのさ。なに、悪い図ずどりではないよ。かきようにもよるが」

「あんまり美うつくしくかくと、結婚けっこんの申込みもうしこが多おほくなって困こまるぜ」

「ハハハじゃ中ちゆうぐらいにかいておこう。結婚けっこんといえ、あの女おんなも、もう嫁よめにゆく時期じきだね。どうだろう、どこかいくち口はないだろうか。里見さとみにも頼たのまれているんだが」

「君きみもらっちゃどうだ」

「ぼくか。ぼくでよければもうが、どうもあの女おんなには信用しんようがなくなつてね」

「なぜ」

「原口はらぐちさんは洋行ようこうする時ときにはたいへんな気込みきごで、わざわざかつぶし鯉節かを買いこ込んで、これでパリーの下宿げしゆくに籠城ろうじょうするなんて大いおほばりだったが、パリーへ着つくやいなや、たちまち豹変ひょうへんしたそうですねって笑わらうんだから始末しまつがわるい。おおかた兄あにきからでも聞いたんだらう」

「あの女おんなは自分の行きたい所いところでなくっちゃ行きすすっこない。勧めすすめたってだめだ。好きな人すひとがあるまで独身どくしんで置くおがいい」

「まったく西洋流せいようりゅうだね。もっともこれからの女おんなはみんなそうなるんだから、それもよからう」

それから二人の間に長い絵画談があった。三四郎は広田先生の西洋の画工の名をたくさん知っているのに驚いた。帰るとき勝手口で下駄を捜していると、先生が梯子段の下へ来て「おい佐々木ちょっと降りて来い」と言っていた。

戸外は寒い。空は高く晴れて、どこから露が降るかと思うくらいである。手が着物にさわると、さわった所だけがひやりとする。人通りの少ない小路を二、三度折れたり曲がったりしてゆくうちに、突然辻占屋に会った。大きな丸い提灯をつけて、腰から下をまっ赤にしている。三四郎は辻占が買ってみたくなった。しかしあえて買わなかった。杉垣に羽織の肩が触れるほどに、赤い提灯をよけて通した。しばらくして、暗い所をはすに抜けると、追分の通りへ出た。角に蕎麦屋がある。三四郎は今度は思い切って暖簾をくぐった。少し酒を飲むためである。

高等学校の生徒が三人いる。近ごろ学校の先生が昼の弁当に蕎麦を食う者が多くなったと話している。蕎麦屋の担夫が午砲が鳴ると、蒸籠や種ものを山のように肩へ載せて、急いで校門をはいつてくる。この蕎麦屋はあれでだいぶもうかるだろうと話している。なんとかいう先生は夏でも釜揚げうどんを食うが、どういうものだろうと言っている。おおかた胃が悪いんだろうと言っている。そのほかいろいろの事を言っている。教師の名はたいてい呼び棄てにする。なかに一人広田さんと言った者がある。それからなぜ広田さんは独身でいるかという議論を始めた。広田さんの所へ行くと女の裸体画がかけてあるから、女がきれいなんじゃなからうという説である。もっともその裸体画は西洋人だからあてにならない。日本の女はきれいかもしれないという説である。いや失恋の結果に違いないという説も出た。失恋してあんな変人になったのかと質問した者もあった。しかし若い美人が出入するという噂があるが本当かと聞いた者もあった。

だんだん聞いているうちに、要するに広田先生は偉い人だということになった。なぜ偉いか三四郎にもよくわからないが、とにかくこの三人は三人ながら与次郎の書いた「偉大なる暗闇」を読んでいる。現にあれを読んでから、急に広田さんが好きになったと言っている。時々「偉大なる暗闇」のなかにある警句などを引用してくる。そうしてさかんに与次郎の文章をほめている。零余子とはだれだろうと不思議がっている。なにしろよほどよく広田さんを知っている男に相違ないということには三人とも同意した。

三四郎はそばにいて、なるほどと感心した。与次郎が「偉大なる暗闇」を書くはずである。文芸時評の売れ高の少ないのは当人の自白したとおりで、麗々しく彼のいわゆる大論文を掲げて得意がるのは、虚栄心の満足以外になんのためになるだろうと疑っていたが、これで見ると活版の勢力はやはりたいしたものである。与次郎の主張するとおり、一言でも半句でも言わないほうが損になる。人の評判はこんなところからあがり、またこんなところから落ちると、筆を執るものの責任が恐ろしくなって、三四郎は蕎麦屋を出た。

下宿へ帰ると、酒はもうさめてしまった。なんだかつまらなくっていけない。机の前にすわって、ぼんやりしていると、下女が下から湯沸に熱い湯を入れて持って来たついでに、封書を一通置いていった。また母の手紙である。三四郎はすぐ封を切った。きょうは母の手跡を見るのがはなはだうれしい。

手紙はかなり長いものであったが、べつだんの事も書いてない。ことに三輪田のお光さんについては一歩も述べてないので大いにありがたかった。けれどもなかに妙な助言がある。

お前は子供の時から度胸がなくっていけない。度胸の悪いのはたいへんな損で、試験の時なぞにはどのくらい困るかしれない。興津の高さんは、あんなに学問ができて、中学校の先生をしているが、検定試験を受けるたびに、からだがふるえて、うまく答案ができないので、気の毒なことにいまだに月給が上がらずにいる。友だちの医学士とかに頼んでふるえのとまる丸薬をこしらえてもらって、試験前に飲んで出たがやっぱりふるえたそうである。お前のはふるふるふるえるほどでもないようだから、平生から持薬に度胸のすわる薬を東京の医者にもこしらえてもらって飲んでみる。直らないこともなかろうというのである。

三四郎はばかばかしいと思った。けれどもばかばかしいうちに大なる感謝を見出した。母は本当に親切なものであると、つくづく感心した。その晩一時ごろまでかかって長い返事を母にやった。そのなかには東京はあまりおもしろい所ではないという一句があった。